

## 過去の地震から知る、未来の備え ～枕元に置くべきものは

名古屋大学災害対策室 木村玲欧

未来の地震にそなえるためには、過去の地震を知ることが大切。1945年にこの地域で2,306人の死者を出した「三河地震」から、未来の備えにつながる教訓を考えていきます。

■軍隊にいたもんで、服は布団の上に置き、靴も土間にあげてあった。すぐに身支度ができた。

(明治村西端集落(碧南市湖西町)・原田さん)

地震は真夜中。寝込みを襲われて、家は傾き、壁はずれ、電気はつかない。しかし、わたしは兵隊をやっている暗闇に慣れているから、あまり恐くはなかった。それでとにかく壊れていない家の南北方向のガラス戸を蹴破って出ようと思った。

わたしは兵隊なもんだから、靴は土間の隅に、軍刀は扉につかえ棒のように立てかけていた。服は自分の寝た布団の上に置いておいた。それで、布団の上の服を着て、靴は倒れた壁の下から見つけることができた。それで表に出ることができたのです。



地震のゆれを乗りきったら、次にやることは「寝室から外に出る」こと。その時に必要な最低限の道具として、1)スリッパ、2)懐中電灯、3)笛、4)眼鏡があげられます。

地震で多いケガは、ガラスや食器・木片などが散乱した中を歩いてできる「足のケガ」で、ケガをすれば、その後の避難・救出に大きく影響します。玄関までのスリッパ、もしくは普段使わない運動靴や編み上げのブーツなどをまくらもとに用意しておきましょう。

光を確保することも、避難や安否確認には不可欠。「懐中電灯」は、電池のいらぬ手回し充電型の懐中電灯が、電器店・ホームセンター等で販売しています。ラジオやサイレンが附属していたり、携帯電話の充電ができるタイプなども数千円で販売しています。

「笛」は、生き埋め、閉じこめられたときには、「少ない息(体力消耗)で大きな音を出して自分の居場所を知らせる」道具になります。手回し充電式の懐中電灯に「サイレン機能」があるのは、このような理由からです。

最後の「眼鏡」は、意外に盲点。地震後は家の中も外もめちゃくちゃで、普段どおりには動きません。眼鏡がないと、普段は何も困らない人が、一転、目の不自由な「災害弱者」になります。予備の眼鏡、昔の眼鏡など、枕元と非常用持ち出し袋に「もう一つの眼鏡」を備えることは重要です。その人の状態に応じて、補聴器や入れ歯、杖なども準備し、「外に出る体制」を整えましょう。

「災害後にあわてふためき光を探す」「不注意で足をケガする」「大声で『出してくれ』と叫び続ける」ことなく、あわてずに次の行動を行うための備えは、地震が起こってからではできません。